

# 新しき心

— 新年語 —

倉橋惣三

新日本の建設といひ、そのための、新教育原理といひ、新教育方法といひ、すべては新しい心によつて發し、新しい心によつてのみ行われる。新しい酒を古い革袋に盛つてはならぬとかいうことがあるが、新しい革袋だからとて古い酒を盛つたのでは、決して眞に新しくはならない。すべて、新しいことは中味のことである。心のことである。新しい生命を缺く心に、新教育原理も新教育方法もない。大切なものは、日々に新しく、常に新しい心である。

原理には古く傳わる永遠の原理も少なくない。必ずしも、新説をのみ責いとしなないかも知れない。しかも、それは古きが故に權威があるのではない。永遠性の故に價值があるのではない。古くても古びない新しさにこそ權威があるのである。永遠に不變な新しさにこそ價值があるのである。方法には習と熟とを必要とするところが多い。しかも、それはたゞ手なれと熟練に一任せる巧者上手のよさのみではない。度びを重ね年を積んでこそ到達した新しさ、くるいのない不動の

新しさにこそ、なまじ新しがりの未熟者に得られない眞の新しさが出るのである。要は、そのうちに一貫する新しさである。ましてや、新説新法の名と形のみあつても、常に新しい心に生命づけられているのでなかつたら、なんの眞も妙もあり得ない。

最も常に新しいものは自然である。千古同じ静かさに流れるふん泉の水の新たなのはいうまでもない。湧きつゞけほとばしりつゞけて、常に新しいのである。常盤木の色のいつも新たなのみでなく、枯れ朽ちないかぎり、同じ形のまゝに新しさを變えない。冬に追われて落葉しても、その下には更に新しい芽が待つてゐる。落葉は新緑を約束し、新緑を用意してゐるとさえいえる。春毎に花の色と香りの新たななるは、眞に年々歳々變らずである。それもたゞに同じ花が開くというのではない。同じ新しさに、年々歳々咲き香るのである。月の新しさは新月にかぎらない。満つるも缺くるも、夜

毎に新しい月の形であり、とわに古りない月の光りである。その新しい光りに、古い面影を結びつけて、今夜の新しい月を感じないのは、人間感傷のとらわれに過ぎない。しかも、その古い面影さへ、月にさそわれて新たなのである。晝毎にさし昇る日の光りの新たなのはもとより、沈みゆく落日の光りも亦、なんぞ目さめるばかり夕毎に新たな。今日を昨日に同じくし、明日を今日に變らじとするのは、新をおそるゝ弱き心にほかならない。自ら燃ゆる天日は、その日その日の新しい光りに輝いているのである。日に新たにしてみても、日に舊くしてまた舊きに止まるのみである。

その常に新たな自然を、舊く詠ずる詩人もあり、舊く描く畫家もある。時に新語調をならべ、僅に新手法を弄しても、その詩に流れる泉水はどよみ、その畫に塗られる日光は鈍す。

藝術よりも古り易いものは教育であり、藝術家よりも古り易いものは教育家である。眞を觀念の上にもとめる新教育も、巧を工夫の上にとらす新教育法も、その觀念を工夫の所に止まつて、教育者の舊き心に用いられては、やつぱり同じ舊い教育に終る。評調のみによつて必ずしも新しい詩が生れず、手法のみによつて必ずしも新しい畫が成らないのと同じである。或はそれ以上かも知れない。そこに出来るものは、

似而非新教育に墮するでもあろう。いくら水壓が強くて、貯水タンクから押し出される水が古く、いくら燭光が強くて、人造ランプにともされる光が消え易いのに似てもいい。水源が大地にないからである。光源が天日にないからである。しからば、教育を常に眞に新たなならしめるための、教育者の心にとつての水源光源は何であらうか。問うまでもなく、それ自身常に新たな兒童の心にある。

兒童の心の常に新たなあらわれは、その生き／＼としていゝる情感においても、その潑刺たる行動においても、その眞率なる言語においても、その自在の想像においても、こゝにあらためて敘述するの要はあるまい。藝術家の前に豊富な自然が在る如く、教育者の前に豊富に在るのである。たゞ、それを受取るすなおさと、それに感動する生命とさえ、われらにあればいい。

が、しばらく、兒童の心が何が故に斯くも常に新しいかを考えてみれば、それには、いろ／＼の解釋がつくでもあろう。或はいう。つくろわざれない本然の子なるが故にと。それも確にそうである。或はいう。いつわらざる眞率の發露の故にと。それも確にそうである。おとなの心の舊くなるのが、つくろいといつわりとよることの多いのに對して、それは確にそうである。しかし、それだけでは、心の舊くせられない説明であつても、又、心の新しさを保つことの理由であつても、新しい心の常に新しく發動し湧出することを解明

してはいない。更に詠嘆して、その新生の生命の故にといふ。まことにその通りであらうし、驚異の感を以て、誰れもそういふたい。その偉大の生命があつた小さきものにあることは、まことに驚くべく、限りなく貴いことである。それは、感激するものにとつては、大地にたくえる大生命、天日に藏せられる大生命に似たものとなさへ感じられる。しかし、その生命は動いた時のみ生活として新しい。教育が兒童に觀る新しさは、新しいものとしてだけでなく、常に新しい生活者としてである。そこで、その大生命が、兒童をして常に新しい生活者たらしめるのは何によるか。もつとはつきりいへば、何のすがたによるか。つまり、生命が、たゞ存在するだけでなく、どんなすがたで動くところに、生活を常住の新しさにあらしめるかということになる。——こう考へ來つて、答は言葉として極めて月並であるが、無限の意義をもつ「生長」である。不斷の發達の動きである。それによる力強い生活々動である。

わたしは茲で、理を語らうとしていない。兒童の生活の新しさを感じ、その新しい生活・動に常に新しく反應し、假りにも、その新しさを妨げ古びさせることのないように、われらの心を常に新しからしめたいことを希求しているのである。こんな新しい心の兒童の前にあり常に取り圍まれていながら、教育者ほど、兒童の新しい心にまひし、鈍化し、時には、その餘りに新しい心を、もて餘してさえいるものはない

かも知れない。しかもそれは、凡庸な藝術家と同じなさけなさであり、われら多くの恥ずかしい反省であり、黙して自ら悲しむばかりはなすが、共に語りたいのは、その、自分の古びた心を、新教育原理、新教育方法の「新しさ」で覆い去つてはならぬことである。教育の新しい心は、理論と方法の新だけで得られないことを、あの兒童の新しい心に直接に觸れながら自戒したのである。新教育原理と新教育法も、理論方法の上だけでなく、つまりは、われら教育者に、新しい心をよみがえらせるものでなければなるまいが、新しい心をもつものゝみが、新しい原理と方法とを、眞に新しからしめるともいふ得る。

すべて、眞に新しいことは、心の新しさにのみある。教育において殊に。

○親しい會話……

- 「新年おめ……」
- 「おめ……」
- 「おめずらしのね」
- 「……どうをすらしの」
- 「……」
- 「そうね。だが、何がめずらしの」
- 「だつて、大層早くいらしたから」
- 「ことしから、早く來ることにしたの」
- 「感心ね」
- 「子どもよりおくれたりして済まなかつたわ」